

ID-Link を用いた医療介護連携における「ICF シート」の活用

○野田正貴（ノダ マサタカ）1）、中井拓哉 1）、佐藤由加里 2）、滝沢礼子 2）、高橋 肇 3）

1）社会医療法人高橋病院 地域包括ケア推進室 2）同法人情報システム室 3）同理事長

【はじめに】

平成 19 年全国に先駆け、当法人と市立函館病院間で ID-Link を稼働した。当システムを使うことで医療機関との情報共有はスムーズとなり、各職種が専門性にあった情報を入手しやすくなった。

当法人の介護保険領域では、介護老人保健施設、グループホーム、ケアハウスを始めとした各入居施設や、居宅介護支援事業所、訪問リハビリステーション、小規模多機能ホームなど様々な在宅サービスを展開しており、医療・介護連携は不可欠なものであるため、ID-Link 稼働当初より情報共有を強化してきた。

本院回復期リハビリテーション病棟で使用している「ICF シート」は、退院後に ID-Link を活用することにより法人内情報連携に貢献しており、今回はその取組みを紹介したい。

【ICF シートの紹介】

ICF 分類を用いたケースカンファレンスを実施し、多職種がその分類を共有できるネットワーク体制とした。情報共有ツールは、当法人情報システム室が独自開発したソフトを利用し、名称を「ICF シート」として運用を行った。ICF シートは 1 患者ごとに多職種で作成し、「生活目標」「短期目標」を設定する仕組みとした。

【法人内連携の実際】

ICF シートの法人内適応対象者は、当法人居宅介護支援事業所ないし当院外来を利用している患者である。以下、一例として本院と老健施設との ICF シートの流れを示す。①本院回復期リハ病棟に入院時、電子カルテと FIM 管理システム（オリジナル）を連動、②ICF 作成システム（オリジナル）で ICF を作成、③ICF 作成システムで受け渡し用 ICF データファイルの作成、④本院クローズドネットワークから ID-Link を経由することでクラウドサーバに受け渡し、⑤老健はオープンインターネット経由で ID-Link から ICF データファイルを取得、⑥ID-Link から ICF データファイルを取得後、ICF 閲覧システムへ取り込み。

複数の事業者が関わっている場合でも ICF シートを更新し上書きすることで、切れ目なくアセスメントすることが可能となっている。また、当院再入院の場合でも ID-Link 上の ICF シートを継続利用することにより、入院前の生活の様子を知ることができ、退院後の目標設定にも役立っている。ICF シートは、個別性を重視するため、その人の生活の質や生きがいを知ることができ、ACP にも活用できると考えており、介護居宅支援事業所やケアハウスでは、ICF と ACP を同時に評価できる仕組みとなっている。

【今後の展望】

今回の取組みは、現時点で法人内に限定されている。今後は、ICF などの共通フォーマットを設定することにより、地域で医療介護のシームレスな連携を達成するとともに、多様なデータ解析にも活かすことができるようにと考えている。